人名の語頭音と語末音

田　籠　　　博

0．はじめに

本稿は人名（氏名のうちの「名」）を音の面から分析した結果に多少の検討を加えたものである。

日本の人名には、命名者が音の配列を自由に選ぶことができるという類例のない特性がある。一般には漢字表記に関心が向けられ、音としての性質が問われることは稀である。しかし、人名用漢字表にしばられる表記とちがい、読みには何の法的規制もない。日本語の音韻規則にしたがうかぎり、理論上可能な音の配列がすべて許されるのである。こうした条件にありながら、人名の音の配列に何らかの傾向性が存するとすれば、それを人名という言語環境における日本語の音の性質の現れの一つと解することができるのではないだろうか。

本稿は筆者が毎年担当する現代日本語の概説を契機とする。

> 古代の日本語（和語）には、語頭に濁音・ラ行音が立たない、つまり濁音やラ行音で始まる語はないという明確な規則があった。漢語や外来語の借用によって規則としては消えたが、現代にもその名残はみられる。女性の名が濁音で始まることがないのは、濁音語忌避を象徴的に示す事実である。

この趣旨を毎年述べているが、一昨年（2002年）の授業後に二人の受講生から、＜ジュンコ＞という女性名がある、これはどう考えればよいのか、という質問をうけた。実は、この例外は知っていたのだが、その意味について充分考えていなかった。本稿には、その責をはたす目的もある。

語頭音に関連して、人名の語末音についても調査を行ったので、その結果もふくんでいる。

1．使用データ

本稿で扱うデータは、当局の許可を得て、ある国立大学（当時）の平成14年度（2002）在籍学生（学部・大学院）のデータから、①氏名のヨミ、②男女の区別、③日本人と留学生との区別の３項目を抽出したものである。音の特徴を探る目的のため、漢字表記などの個人データは得ていない。概ね18歳から24歳までの年齢層であるから、命名者が両親だとすれば、現在の40代から50代の人々の命名意識

が反映しているはずである。

原データから留学生を除くと男性3475、女性2063で計5538（延べ語数）のデータとなった。同じヨミを整理して男性736、女性379（異なり語数）の名を得た。

本稿では割愛したが、最初にすべての名を男女別、五十音順に一覧した資料を作成した。頻度の高い名を10位まで示す。

【男性】①タカシ73　②ダイスケ58　③コウスケ51　④⑤ケンジ・ヒロシ49
⑥サトシ48　⑦ヒロユキ43　⑧アキラ40　⑨⑩タカヒロ・ナオキ39

【女性】①ユウコ57　②ケイコ46　③トモコ42　④アキコ40　⑤ヨウコ39
⑥ユカ36　⑦ヒロミ35　⑧⑨アイ・ナオコ29　⑩アヤコ27

男性の＜ダイスケ・ナオキ＞、女性の＜ユウコ・アイ＞は世代的特徴を示している[注1]。10位までの累計は男性489、女性380となり、全体に占める比率は14％、18％で、女性名において上位の人名に集まる傾向がある。

以下では、人名を「語」とみなして(1)語長、(2)語頭音の特徴、(3)語末音の特徴の順で検討する。

2．語長

本稿でいう「語長」とは、音韻論的単位の「拍（モーラ）」によって数えた長さである。長母音を認めない立場から、タロウ・リョウは3拍・2拍と数え、ヘイ・レイなどの母音連続も2拍とする。ほぼ文字数に該当する。

集計結果を男女別に表1に示す。

表1　男女別語長分類（異なり語数）

	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍
【男性】	26	254	421	22	13
【女性】	81	298	0	0	0

男女間で明瞭なちがいがある。男性には2拍から6拍まであるが、女性には4拍以上がなく、2拍語か3拍語である。男性では4拍、女性は3拍が基本的な語長のようである。

男性には語長に幅があるのに対して、女性はなぜ4拍以上がないのか。やや古

注1　Web（http://www.kodomo-namae.net/ranking.html）によれば、1984年にダイスケは1位、ナオキが4位、ユウコは4位、アイが1位である。

いデータだが、林（1957）はNHK『日本語アクセント辞典』の見出し語から次の数値を得ている[注2]。

1拍 0.3%　2拍4.8%　3拍22.7%　4拍38.8%　5拍17.7%
6拍11.0%　7拍3.3%　8拍 1.2%　9拍 0.2%　10拍 0.1%

4拍を中心に2拍から6拍の語形が大部分を占めるところは男性の語長と似ている。だとすれば一般語や男性とちがって、女性名が2拍なしい3拍にかぎられる理由は何なのか。

なお、語長との関係で男性名にあっては次のような特徴がある。

2．1　男性名5・6拍語の特徴

男性で最も長い6拍13語は次のとおりである。

エイイチロウ・ケイイチロウ・ケンイチロウ・コウイチロウ・ジュンイチロウ・ショウイチロウ・シンイチロウ・センザブロウ・セイイチロウ・ソウイチロウ・ユウイチロウ・ヨウイチロウ・リョウザブロウ

下線部で示したように、13語中11語が＜～イチロウ＞、2語が＜～ザブロウ＞である。例えば現在の首相の「（小泉）純一郎」のように、2拍の前部要素に「一郎・市郎」「三郎」を後部要素として加えた語構成である。

5拍22語も同様で、

イチタロウ・ウイチロウ・カツタロウ・ケイタロウ・ケンジロウ・ケンタロウ・コウシロウ・コウジロウ・コウタロウ・サンシロウ・ジュイチロウ・ジュンジロウ・ショウタロウ・シンタロウ・シンノスケ・セイタロウ・トラノスケ・フクタロウ・ユウジロウ・ヨウタロウ・リョウタロウ・リンタロウ

＜～タロウ＞12語、＜～ジロウ＞4語、＜～イチロウ＞＜～シロウ＞＜～ノスケ＞各2語である。＜～イチロウ＞は1拍の＜ウ・ジュ＞、その他は2拍の前部要素にそれぞれ続く語構成となっている。

語構成のみならず、これらの5・6拍語にはある種の音的特徴が認められる。6拍のすべて、5拍の16語で、前部要素の2拍目が母音**イ**・**ウ**（音声的には長音）と撥音**ン**なのである。6拍語では

エイ・ケイ・セイ　コウ・ショウ・ソウ・ユウ・リョウ　ケン・ジュン・シン

5拍語では

注2　林（1982）にグラフ化して再録されている。

ケイ·セイ　コウ·ショウ·ユウ·ヨウ·リョウ　ケン·サン·ジュン·シン·リン

などで、<ウ・ジュ><イチ・カツ・トラ・フク>が例外となる。例外は無視できないが、5拍・6拍の前部要素には特殊拍（母音・撥音）が現れやすいという特徴を指摘することができる。

2．2　男性名2拍語の特徴

5拍や6拍と同様に2拍の語にもある種の音特徴がある。ただし、男性名にかぎってで女性名には認められない。

男性の2拍26語で、2拍目（すなわち語末）に立つのは次の拍にかぎられる。（数字は異なり語数。表示なしは1語。）

イ5　**ウ**8　**オ**2　**ク**4　**ル**　**ン**6

語例を挙げれば、

アイ·ダイ·レイ　コウ·ジョウ·ユウ·リョウ　マオ·レオ　タク·ハク

テル　ケン·シュン·ジュン·シン

である。**ク**・**ル**を除き母音**イ**・**ウ**・**オ**と撥音**ン**である。ところが、女性の2拍81語の場合は次のとおりとなる。

ア　**イ**4　**ウ**2　**エ**5　**オ**4　**カ**5　**キ**5　**ク**　**コ**　**サ**3　**ズ**　**チ**　**ナ**8

ノ　**ホ**6　**マ**2　**ミ**13　**メ**　**モ**2　**ヤ**3　**ユ**　**ヨ**2　**ラ**　**リ**6　**ワ**　**ン**

母音が5種、五十音図の全行にわたるが男性名にあった**ル**はない。語例を挙げれば、

ミア　アイ·マイ·レイ　ユウ·リョウ　チエ·ミエ·リエ　ナオ·マオ·ミオ

ミカ·ユカ·リカ　アキ·ミキ·ユキ　ミク　マコ　チサ·ミサ·リサ　カズ

サチ　エナ·カナ·レナ　ユノ　シホ·チホ·ミホ　エマ·シマ　エミ·フミ·ユミ　ユメ　トモ·モモ　アヤ·マヤ·ミヤ　マユ　カヨ·マヨ·ミヨ　ソラ

エリ·マリ·ユリ　ミワ　ジュン

などと多彩である。2拍目（語末）が6種の拍にかぎられる男性とはちがい、多くの拍の組み合わせがある。このように、同じ2拍語でありながら、語末の拍の種類に男女間でおおきな相違が認められる。

3．語頭音の分布

本稿の主題のひとつである語頭音を拍ごとに分類して、五十音図にならって分布を示したのが表2、表3である。数字は異なり語数で、括弧内に延べ語数を示

す。空欄は語例がない。なお、半濁音（パ行音）は語頭に現れることがないから表から省いている。

表２　男性名の語頭音分類表

ア28(138)	イ14 (27)	ウ 1 (1)	エ 9 (18)	オ 1 (4)			
カ47(160)	キ13 (18)	ク10 (14)	ケ25(232)	コ19(147)	キャ	キュ 2 (2)	キョ 3 (6)
ガ 1 (2)	ギ	グ	ゲ 4 (9)	ゴ 2 (8)	ギャ	ギュ	ギョ
サ 6 (59)	シ28(156)	ス 5 (10)	セ 9 (24)	ソ 6 (12)	シャ	シュ16(71)	ショ10(43)
ザ	ジ 2 (5)	ズ	ゼ	ゾ	ジャ	ジュ 9(41)	ジョ 3 (5)
タ77(416)	チ 4 (6)	ツ 9 (43)	テ15 (49)	ト41(151)	チャ	チュ	チョ 1 (1)
ダ 8 (78)			デ	ド 1 (1)			
ナ20 (99)	ニ	ヌ	ネ	ノ34 (75)	ニャ	ニュ	ニョ
ハ 6 (17)	ヒ48(312)	フ11 (17)	ヘ	ホ 3 (3)	ヒャ	ヒュ	ヒョ 1 (1)
バ	ビ	ブ 1 (1)	ベ	ボ	ビャ	ビュ	ビョ
マ37(287)	ミ27 (51)	ム 5 (6)	メ	モ13 (24)	ミャ	ミュ	ミョ
ヤ17 (74)	ユ27(251)	ヨ29(182)					
ラ 1 (1)	リ 4 (4)	ル	レ 4 (4)	ロ	リャ	リュ 8(22)	リョ10(66)
ワ 1 (10)							

表３　女性名の語頭音分類表

ア36(253)	イ 7 (23)	ウ 1 (1)	エ12 (85)	オ			
カ20(102)	キ 8 (15)	ク 4 (26)	ケ 1 (46)	コ 3 (5)	キャ	キュ	キョ 1(46)
ガ	ギ 1 (1)	グ	ゲ	ゴ	ギャ	ギュ	ギョ
サ25(130)	シ 9 (20)	ス 7 (8)	セ 3 (6)	ソ 1 (1)	シャ	シュ	ショ 1(14)
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ジャ	ジュ 3(16)	ジョ
タ11 (26)	チ17 (76)	ツ 2 (2)	テ 2 (3)	ト 9 (78)	チャ	チュ	チョ
ダ			デ	ド			
ナ16 (99)	ニ 1 (1)	ヌ	ネ	ノ 7 (27)	ニャ	ニュ	ニョ
ハ 7 (22)	ヒ12 (95)	フ 6 (20)	ヘ	ホ 1 (1)	ヒャ	ヒュ	ヒョ
バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ビャ	ビュ	ビョ
マ33(196)	ミ44(190)	ム 1 (2)	メ 2 (26)	モ 5 (10)	ミャ	ミュ	ミョ
ヤ 4 (21)		ユ26(215)		ヨ 7 (74)			
ラ	リ11 (55)	ル 2 (6)	レ 5 (17)	ロ	リャ	リュ	リョ 2
ワ 3 (4)							

文化人類学の西江（1989）によると、東アフリカ・ケニヤのルオ族の名付けには生まれた時間にちなむ人名があって、例えば「早朝に」は男Okinyi・女Akinyi、「夜に」は男Otieno・女Atieno というように、男女のちがいが語頭音

a:o の対立でしめされ、ルイヤ族では w:n によっているらしい（149頁）。同じく出口（1995）によると、エチオピア南西部のディジ族では性差による名のちがいはないが、呼びかけの場合には、男へは a- 、女へは i- という接頭辞を名の前につけて区別するという（19頁）注3。

表２、表３にはこうした明瞭な区別はみえないけれども、語例のない拍があるのをはじめ、分布に一定の偏りのあることは明らかである。日本語の拍は人名という環境では均等に機能負担をはたしていないのである。

３．１　頻度による検討

語頭音で頻度の高い拍を、異なり語数10位（男性は11位）まで示す。

表４　異なり語数による頻度順

【男性】①タ77　②ヒ48　③カ47　④ト41　⑤マ37　⑥ノ34　⑦ヨ29
⑧⑨ア・シ28　⑩⑪ミ・ユ27

【女性】①ミ44　②ア36　③マ33　④ユ26　⑤サ25　⑥カ20　⑦チ17
⑧ナ16　⑨⑩エ・ヒ12

10位（11位）までの累計は男性423、女性241となり、全体（男736、女379）の58％、63％である。少数の拍が語頭音として好まれていることを示している。５位までの比率が男性34％、女性43％であるから、女性の語頭音が特定の拍に集りがちなことが分かる。

延べ語数でみると次の順位となる。

表５　延べ語数による頻度順

【男性】①タ416　②ヒ312　③マ287　④ユ251　⑤ケ232　⑥ヨ182　⑦カ160
⑧シ156　⑨ト151　⑩コ147

【女性】①ア253　②ユ215　③マ196　④ミ190　⑤サ130　⑥カ102　⑦ナ 99
⑧ヒ 95　⑨エ85　⑩ト78

10位までの累計は男性2294、女性1443で、全体（男3475、女2063）の66％、70

注3　これから考えると、西江（1989）の紹介するルオ族やルイヤ族の場合も、呼びかけのときの区別であるかもしれない。

%で、異なり語数の場合より上位の拍に集中する。5位までの比率は男性43%、女性48%で、男性が異なり語数より高くなる。

異なり語数で上位の拍は延べ語数でも上位だが、多少の出入りもみられる。男性の異なり語数6位の**ノ**、10位の**ア**は、延べ語数では10位以内になく、代わって**ケ**・**コ**が5位、10位となっている。女性では異なり語数7位の**チ**に代わって10位に**ト**が入る。ただ、**チ**は11位だから上位の拍の安定は変わらない。

10位以内では、男性の**カ**が異なり語数2位から延べ語数7位へ、**ト**が同じく4位から9位へ下がるのに対して、10位の**ユ**が4位に上がり、**ヒ**・**マ**も順位を上げている。女性では、異なり語数1位の**ミ**が述べ語数で4位となるほかはほとんど変動がない。特定の拍へ集まる傾向は女性名の特徴といえよう。

3．2　行別の集計

表2、表3から、五十音図の各行別に集計したのが次の結果である。ただし、拗音は除いた。括弧内は拍の種類である。

表6　語頭拍の行別集計（男性）

［異なり語数］

タ行146(5)　カ行114(5)　マ行82(4)　ヤ行73(3)　ハ行68(4)　ナ行54(2)
サ行 54(5)　ア行 53(5)　ダ行 9(2)　ラ行 9(3)　ガ行 7(3)　ザ行 2(1)
バ行　1(1)　ワ行　1(1)

［述べ語数］

タ行665　カ行571　ヤ行507　マ行368　ハ行349　サ行261　ア行188
ナ行174　ダ行 79　ガ行 19　ワ行 10　ラ行　9　ザ行　5　バ行　1

表7　語頭拍の行別集計(女性)

［異なり語数］

マ行85(5)　ア行56(4)　サ行45(5)　タ行41(5)　ヤ行37(3)　カ行36(5)
ハ行26(4)　ナ行24(3)　ラ行18(4)　ワ行 3(1)　ガ行 1(1)

［述べ語数］

マ行424　ア行362　ヤ行310　カ行194　タ行185　サ行165　ハ行138
ナ行127　ラ行 78　ワ行　4　ガ行　1

表6、表7によれば、男女間でいくらか相違があり、男性ではタ・カ・マ行が、女性ではマ・ア・サ行が上位を占める。男性で1位のタが女性では4位であり、女性で1位のマ行が男性では3位となっている。また、女性で2位のア行は男性では異なり語数8位、延べ語数7位でしかない。

3種の拍しかないヤ行が、男性で異なり語数4位、女性で5位である。延べ語数では男女とも3位となるから、ヤ行の拍（特に**ユ**）が好んで用いられていることを表す。

全体としていえば、男女ともラ行および濁音が下位にあること、特に女性には濁音がガ行の1種（**ギ**）しかないという事実がある。

3．4　五十音図各行別の検討

以下では、各行別に筆者の見出した注意点を述べる。語頭音の在り方を明らかにするには、2拍目との組み合わせをみる必要があるから、必要に応じて触れることにする。なお、濁音と拗音については別項で述べる。

［母音］

母音は**ア**が多用され、**イ**・**エ**にも相当の例があるが、**ウ**・**オ**は稀である。

アは女性では多彩だが、男性では＜アキ～＞15語、＜アツ～＞6語などとしてもっぱら用いられる。

イは女性で＜イク～＞5語、＜イズ～＞2語にかぎられ、＜イオ～・イク～・イサ～・イタ～・イチ～・イッ～＞とある男性の方が範囲が広い。

ウは男性の＜ウイチロウ＞、女性の＜ウイコ＞各1語である。

エは男性の9語中8語が＜エイ～＞で固定し、女性は＜エイ～・エツ～・エミ～・エリ～＞などと多様である。

オは男性の＜オサム＞だけで、女性には語例がない。

［カ行］

男性にカ行の語が多いことは表6に現れている。ところが、やや詳しくみると、拍の在り方にはある種の固定性がありそうである。

カは男性に47語あるが、うち24語は＜カズ～＞、16語が＜カツ～＞、3語が＜カン～＞として現れ、その他は＜カオル・カケル・カゼタ・カナメ＞である。計7種の組み合わせは、20語の女性で、＜カズ～＞7語、＜カナ～＞4語、＜カオ～・カホ～・カヨ～＞各2語、その他＜カエ・カツエ・カンナ＞で計8種の組み合わせがあるのと比べ、むしろ少ない。

キは、男性で＜キヨ～＞13語、＜キミ～＞３語に集まり、他は＜キズク・キワム＞である。女性８語も＜キミ～＞４語、＜キヌ～・キヨ～＞各２語と変化にとぼしい。

クは男性ではすべて＜クニ～＞である。女性は＜クニ～・クミ～＞各２語に分かれる。

ケの男性25語は、＜ケイ～＞12語と＜ケン～＞13語で二分される。女性は＜ケイコ＞１語のみだが、延べ語数は46を数える。

コは男性で19語すべてが＜コウ～＞である。女性では＜コズエ・コトエ・コトミ＞の３語である。

男性についていえば、語例こそ多いものの、２拍目との組み合わせが**ク**・**ケ**・**コ**の３種を合わせても４種類にすぎない。女性も５種類だから、これらが自由に用いられているとはとても言えない。

［サ行］

サ行は全体に語例があるが、拍ごとにみればやはり偏りがある。

サは女性に多く、＜サオリ・サチコ・サトコ・サヤカ＞に集まる傾向があるものの、２拍目との組み合わせは様々である。男性では＜サトシ＞１語に集中し、他は＜サチヒロ・サトノブ・サブロウ・サンシロウ＞である。

シは男性では＜シゲ～＞11語、＜シン～＞13語が主で、＜シズノリ・シノブ・シホウ・シロウ＞が１語ずつある。女性は＜シズ～＞３語が目立つ程度で、２拍目がどれかに集まるようにはみえない。

スは男女とも語例が多くない。男性では＜スグル・ススム・スナオ・スミオ・スミト＞と分散的で、女性も＜スミ～＞４語のほかは＜スナエ・スバル・スマコ＞があるだけである。

セは男性では＜セイイチ・セイゴ・セイジ＞などすべて＜セイ～＞であり、女性には＜セイコ・セツコ・セリ＞３語しかない。

ソは男性で＜ソウイチ・ソウヘイ＞などすべて＜ソウ～＞である。女性は＜ソラ＞１語である。

男女とも、**サ**・**シ**・**ス**が比較的多様であるのに比べると、**セ**・**ソ**はやや窮屈な存在で、女性の**ソ**は例外的というべきだろう。

［ザ行］

ザ行は女性になく、男性にも**ジ**が２語＜ジロウ・ジン＞とあるだけである。

［タ行］

タ行全体としては、男性に**チ**が少なく、女性で**ツ**・**テ**が稀なようである。

男性名で最多である**タ**も、２拍目との組み合わせでみると意外に使用の幅がせまい。77語もありながら、＜タカ～＞24、＜タケ～＞16、＜タイ～・タク～＞各10、＜タツ～＞９、＜タダ～＞４の６種で73語を占める。残るのは＜タスク・タヘイ・タモツ・タロウ＞にすぎない。11語と少ない女性でも、＜タエ～・タカ～・タマ～＞各３語で、あとは＜タケコ・タミ＞という具合である。

チは女性に多く、男性は少ない。男性は＜チアキ・チカシ・チヒロ・チヨシ＞で、このうち＜チアキ・チヒロ＞は女性にもみえている。女性では異なり語数７位と多く、語例も様々である。

ツは男性については特に触れるべき点はない。女性には稀で、＜ツグミ・ツバサ＞２語であり、＜ツバサ＞は男性としても用いられている。

テも女性では稀で＜テツコ・テルミ＞の２語である。男性では＜テツ～＞９語、＜テル～＞５語に二分され、残る１語も＜テッペイ＞だから、語数が多いといっても用法上は女性とまったく同じである。

トも男性に多いが、＜トシ～＞20語、＜トモ～＞15語、＜トヨ～・トラ～＞各２語であり、残るのは＜トオル・トキヒサ＞の２語にすぎない。女性も、＜トモ～＞６語、＜トシ＞２語、あとは＜トヨコ＞であるから、男性とちがいがない。＜トラ～＞が男性にかぎられるのは当然か。ただ、サ行で**ソ**が例外的であったように、女性名にオ段の拍が少ないことからすると、**ト**がやや多い事実を指摘できる。

［ダ行］

女性には語例がない。**ダ**はすべて＜ダイ～＞の組み合わせで用いられる。＜ダイスケ＞が本データの世代的特徴であることについては既に述べた。**ド**は＜ドウネン＞というやや珍しい語である。

［ナ行］

ナ行は全体として少なくないが、語例は**ナ**・**ノ**に集まっている。

ナは男性では＜ナオ～＞15語がもっぱらで、他は＜ナガユキ・ナギサ・ナツキ・ナリフミ・ナルキ＞である。女性では＜ナツ～＞６語、＜ナオ～・ナナ～＞各３語、＜ナミ～＞２語であり、他に＜ナギサ・ナホコ＞がある。

ニ・**ヌ**・**ネ**については、女性の＜ニイナ＞が唯一の例外で、男女を通じて語例がない。**ナ**・**ノ**が多用されながらこの３種に語例がない理由は分からない[注4]。

注4　今栄（1960）によると、ヌは２音節対（digram）の前音節では最小の頻度でしか↗

語例の多い**ノ**であるが、男性では＜ノブ～・ノリ～＞が各16語で、他は＜ノゾム・ノボル＞である。女性も＜ノリ～＞3語、＜ノブ＞2語と同様で、＜ノゾミ・ノドカ＞が加わる。

［ハ行］

ハ行では、男女とも**ヘ**の語例がなく、**ホ**が稀なのに比べて、**ヒ**の語例の多いことが注意される。

ハは男性では多いとはいえず、＜ハル～＞3語のほかは＜ハク・ハジメ・ハヤト＞である。女性ではさらにはっきりと＜ハナ～＞3語、＜ハル＞4語に二分される。

ヒは男性48語が＜ヒロ～＞24語、＜ヒデ～＞14語、＜ヒサ～＞6語、＜ヒト～＞3語に分かれ、＜ヒカリ＞が加わる。女性も＜ヒロ～＞4語、＜ヒサ～＞3語、＜ヒデ～＞2語と同じ傾向にあり、他に＜ヒイロ・ヒカリ・ヒトミ＞がある。

フも男女とも同じ傾向を示す。男性では＜フミ～＞7語が大半で、＜フクタロウ・フサノブ・フトシ・フユキ＞が1語ずつである。女性でも＜フミ～＞4語のほかは＜フサコ・フユミ＞しかない。

ホは男女とも稀で、男性で＜ホクト・ホタカ・ホダカ＞の3語、女性で＜ホダカ＞1語である。＜ホタカ・ホダカ＞が山岳名「穂高」に由来するとすれば、人名の語頭音としての**ホ**は例外的なのかもしれない。

［バ行］

バ行は**バ**に男性の＜ブンゴ＞があるだけである。

［マ行］

マ行は、ナ行ほど著しくないものの、行内で不均衡な分布をみせる。**マ**・**ミ**は男女とも多用されるのに対して、男性に**メ**の語例がなく、女性では**ム**も稀で、**メ**・**モ**も多くない。

マは男性では＜マサ～＞29語に集まり、他は＜マオ・マカル・マコト・マスタツ・マスラ・マナブ・マヒト・マモル＞と分散する。＜マコト・マナブ＞は述べ語数が多いが、拍の在り方としては限定的である。女性はこれとちがい、＜マキ～・マサ～・マユ～＞各4語のほか2拍目には多くの種類がある。男女間で相違が認められる拍である。

↗なく、ネも下位にある。ニの頻度が高いのは格助詞「に」のためである。これを集計し直した林（1982）ではナ行の比率が高いけれども、ニ・ヌ・ネの実際を反映しているわけではない。筆者の見たある名付け書では、男性名にヌの例が一例もなかった。

マと同様、**ミ**にも男女間でちがいがある。男性では＜ミツ～＞12語、＜ミチ～＞９語のほかは＜ミネ～＞２語、＜ミガク・ミキヒロ・ミナミ・ミノル＞ですべてである。女性では＜ミズ～＞７語、＜ミサ～・ミチ～・ミナ～＞各４語、＜ミツ～＞３語のほか種々の拍と結びつく。男性には語例のない母音＜ミア・ミエ・ミオ＞、ヤ行＜ミヤ・ミユ・ミヨ＞、ラ行＜ミレ＞、ワ行＜ミワ＞などは、女性の特徴と言えるだろう。

ムは男女とも語例が少なく、男性は５語すべてが＜ムネ～＞で、女性は＜ムツミ＞の１語である。

メは女性にかぎられ、しかも＜メグミ・メグム＞と同源の語である。

モは男性では＜モト～＞がほとんどで、他は＜モリアキ＞しかない。女性でも＜モモ～＞３語、＜モト～＞２語にかぎられる。

音声的には同じ鼻音に属するナ行と比べると、**ヌ**・**ネ**と同様に**ム**・**メ**が少ないことは共通している。しかし、ナ行では**ニ**も稀であったのに反して、**ミ**は女性では最多の異なり語数をもつ。このような相違がある理由は今は説明できない。

［ヤ行］

ヤ行には拍が３種しかないが、行別の異なり語数で男性が４位、女性が５位であり、延べ語数では男女とも３位となる。特に、女性名の頻度で＜ユウコ＞が１位、＜ヨウコ＞が５位、＜ユカ＞が６位と目立っている。

ヤは、男性ではすべて＜ヤス～＞であり、女性でも＜ヤス～＞３語と＜ヤヨイ＞である。３種のうちでは語例がとぼしい。

ユは男性は＜ユウ～＞17語と＜ユキ～＞９語とで占められ、ほかには＜ユタカ＞しかない。女性は＜ユミ～・ユリ～＞各５語、＜ユウ～・ユキ＞各４語、＜ユカ～＞３語に分かれ、＜ユイ・ユツキ・ユノ・ユフコ・ユメ＞がある。拍別の延べ語数で男性４位、女性２位でありながら、異なり語数では10位、３位と下がるのは、特に男性で語の種類がかぎられるためである。

ヨは男性に多いが、＜ヨシ～＞22語、＜ヨウ～＞６語で占められ、ほかに＜ヨリアキ＞がある。女性は＜ヨシ～＞５語のほかは＜ヨウコ・ヨリコ＞があるだけだから、これも案外に使用幅がせまい。

［ラ行］

ラ行の拍が語頭に立つことは和語ではないから、**ラ**・**ロ**に男性の＜ラク＞以外の語が男女ともなく、男性に**ル**がないことも意外ではない。むしろ、**リ**・**レ**や女性に**ル**の語例があることの方が注意される。

リは男性では少なく、＜リイチ・リキジ・リキュウ・リンタロウ＞の４語である。女性では＜リエ～・リカ～・リサ～・リナ～＞各２語のほか、＜リオ・リツコ・リンコ＞がある。

ルは男性になく、女性も＜ルミ・ルミコ＞しかない。

レは男性で＜レイ・レイジ・レオ・レツシ＞の４語、女性は＜レイ・レイカ・レイコ・レナ・レミ＞の５語で＜レイ～＞に偏る傾向がある。

［ワ行］

ワ行には**ワ**１種しか拍がないが、一般語からすればそれなりの語例がありそうだが、実際には男性で＜ワタル＞１語、女性が＜ワカ～＞で尽くされるところは限定的である。

3．5　母音別の検討

表２、表３を母音別に集計したのが表８である。括弧内は拍の種類である。

表８　語頭拍の母音別集計

【男性】

［異なり語数］	ア段 249(12)	オ段149(10)	イ段140(8)	ウ段 69(8)	エ段 66(6)
［延べ語数］	ア段1341	オ段607	イ段579	ウ段343	エ段336

【女性】

［異なり語数］	ア段 155 (9)	イ段110 (9)	ウ段 49(8)	オ段 33(7)	エ段 25(6)
［延べ語数］	ア段 852	イ段476	ウ段280	オ段196	エ段187

男女によるオ段のちがいが目立っている。男性では２位で、拍も10種だが、女性では４位に下がり７種に減る。男女ともにエ段は最も少ない。ナ行のニを除いて、母音の種類が拍の分布に影響しているようである。

ア段は男女を通じて最も語例が多い。男性では、**ヤ**が＜ヤス～＞のみで、**ラ**が＜ラク＞のみ、**ワ**も＜ワタル＞１語しかない。語例の多い拍でも、**ア**が＜アキ～・アツ～＞にかぎられ、カは＜カズ～・カツ～＞に集まり、**サ**は＜サトシ＞１語で延べ語数の大半を占め、**ナ**は＜ナオ～＞、**マ**は＜マサ～＞に集まりがちという傾向がある。女性では**ア**に多彩な語があり、**カ・サ・タ・ナ・マ**も男性より柔軟に語を作っている。それに対して、**ハ**が＜ハナ～・ハル～＞と固定的で、**ヤ**が＜ヤス～＞に集まるという事実もある。

イ段には多用される**ミ**・**ヒ**がある一方で、**ニ**が男性で語例がなく、女性で＜ニイナ＞1語であるなど、拍ごとに極端な差がある。その他の拍では、**チ**が女性に多いという程度で、特に指摘すべきことはない。

ウ段は男性で**ヌ**・**ル**が語例なく、女性でも**ヌ**が皆無、その他も語例が少ない。例えば**ウ**は男女とも＜ウイチロウ＞＜ウイコ＞の各1語しかなく、**ク**は男性では＜クニ～＞の1種、女性でも＜クニ～・クミ～＞にかぎられ、**ツ**は＜ツグミ・ツバサ＞の2語、**ム**は＜ムツミ＞の1語、**ル**も女性が＜ルミ・ルミコ＞の2語である。**ユ**を際立った例外として、ウ段の拍は語頭に立ちにくいようである。

エ段は男女とも最も語例が少ない。男性で**ネ**・**ヘ**・**メ**の語例がなく、**レ**も少ない。語例が比較的多い**エ**は＜エイ～＞、**ケ**は＜ケイ～・ケン～＞、**セ**は＜セイ～＞、**テ**は＜テツ～・テル～＞に固定的である。女性も**ネ**・**ヘ**の語例がなく、**ケ**は＜ケイコ＞の1語、**セ**が3語、**テ**が＜テツコ・テルミ＞、**メ**が＜メグミ・メグム＞の2語、そして**レ**も多いとはいえない。このように、分布に空白が多く、語例があるとしても少数にとどまる。

オ段は**ロ**が男女とも語例がないのを別にすれば、男女で様相を異にする。男性では母音別2位だが、女性では4位である。男性で広く語例がある中で、**オ**は＜オサム＞1語と稀で、**ソ**は＜ソウ～＞1種だけであり、**ホ**も3語と少ない。語例の多い**コ**も＜コウ～＞1種でしかなく、**モ**も＜モト～＞にほとんどかぎられるなど固定的な印象がある。語例の少ない女性では、母音**オ**の語例がないのをはじめ、**コ**は3語、**ソ**は＜ソラ＞の1語、**ホ**も＜ホダカ＞の1語である。仮に**ソ**・**ホ**の語例を例外的だとすれば、女性では**オ**・**ソ**・**ホ**・**ロ**の4種の分布が空白となる。

3．6　拗音について

これまで述べてきた直音に対して、人名の語頭音としての拗音には、まったく別の分布状況がある。例えば直音で最も語例の多かったア段に相当する**キャ**・**シャ**類、すなわちア段の拗音を語頭の拍とする語は一例もない。

男性名における拗音には、

　カ行（**キュ**・**キョ**）　サ行（**シュ**・**ショ**）　ザ行（**ジュ**・**ジョ**）　タ行（**チョ**）
　ハ行（**ヒョ**）　ラ行（**リュ**・**リョ**）

があり、女性では

　カ行（**キョ**）　サ行（**ショ**）　ザ行（**ジュ**）　ラ行（**リョ**）

と少ない。しかも、拗音の大部分は

【男性】キュウ～・キョウ～　シュウ～・シュン～・ショウ～　ジュン～・ジョウ～　チョウ～　リュウ～・リョウ～

【女性】キョウ～　ショウ～　ジュン～　リョウ～

として語を構成している。拗音に続く2拍目が**ウ・ン**で、音声学上の1音節をなすものである。例外は、男性の＜ジュイチロウ＞＜ヒョソク＞、女性の＜ジュリ＞にすぎない。このうち＜ヒョソク＞は氏姓から判断して外国籍の人名らしく、だとすれば2語が例外となるだけである。

拗音を語頭とする語にはこのような限定的な面がある。ア段の**キャ・シャ**類が皆無であることの説明もこの事実から説明できる。17世紀以降の日本語では、＜キャウ～＞などの音連続が＜キョウ～＞と発音上の区別を失って同音となったことは日本語史の教えるところだからである。＜キャン～＞が和語的でないことは言うまでもない。

行別にみると、男女を通じてカ・ガ・サ・ザ・ラ行の拗音に語例があるのに対して、ナ・バ・マ行はすべて空白である。男性ではラ行の直音は多くないのに、**リュ・リョ**の語例が多いのは面白い事実である。

濁音の**ジュ・ジョ**は、男性ではどちらも語例があるが、女性では**ジュ**にかぎられる。

母音別にみると、男性ではウ段・オ段がほぼそろっているが、女性ではオ段が多く、ウ段は＜ジュ＞のみである。直音でオ段の拍が少なかったのとは相反する傾向を示している。

3．8　濁音語について

本稿の契機となった濁音語（濁音で始まる語）についてみる。男性には、

ガ　ゲ4　**ゴ**2　**ジ**2　**ダ**8　**ド　ブ**

とガ・ザ・ダ・バ各行の7種の拍に18語ある。ところが、語例をみると、意外に拍の組み合わせがとぼしいのである。

ガク　ゲン・ゲンキ・ゲンタ・ゲンヨウ　ゴウ・ゴウジ　ジロウ・ジン　ダイ・ダイキ・ダイゴ・ダイサク・ダイシ・ダイスケ・ダイゾウ・ダイチ　ドウネン　ブンゴ

下線を施した2語を除いて、＜ゴウ～・ドウ～＞＜ダイ～＞＜ゲン～・ジン～・ブン～＞というように2拍目が母音**ウ・イ**か撥音**ン**である。拗音の**ジュ・ジョ**が、1語を除いて＜ジュン～・ジョウ～＞であったのと同じである。女性の＜ギ

ンガ＞や拗音の＜ジュン・ジュンコ＞が、こうした傾向に沿っていることは言うまでもない。濁音語が拗音と同様の音の構成をとるのは、それらが漢字音に由来し、漢字音の拍の性質よるからである。男性の例外となる＜ガク＞もその範囲で説明できる。男性でもう一つの例外の＜ジロウ＞、女性の＜ジュリ＞は、音の性質からではなく、語構成の面から説明すべきかと思われる。

さて、なぜ女性名で＜ジュン・ジュンコ＞という濁音語だけが許されるのか、という問題が残っている。実際のところ、語頭音の分布を検討すると、それが女性名に許容される理由を見出すことが一層困難になってしまうのである。ジュという拍の音声的特徴によるのか、あるいは、「純・順・淳」など漢字の好印象によるのか、または外来語の影響を想定するのか、現段階では何の解答も得ていない。

4　人名の語末音について

人名に関しては、語末の要素についても関心が向けられることがある。特に、女性名に「〜子」が少なくなったなどは社会的な話題にまでなる。本稿では、こうした語構成の問題はあつかわず、たんに語末音の分布をみるだけにとどめる。ただし、拍の在り方を検討する過程で語構成にかかわる点についても触れるところがある。

男女を通じて拗音が語末にくることはないから、次の表には省いている。林（1957）は一般語でも語末の拗音には制限のあることを述べているが、人名ではさらにそれが徹底しているわけである。

表の数字は異なり語数で、空欄は語例がないことを表す。

表9　男性の語末音分類表（3拍／4拍）

ア	**イ** 2／20	**ウ** 5／ 2	エ	**オ**25／ 4
カ 5／15	**キ**27／46	**ク** 4／ 5	**ケ** 0／16	**コ** 0／21
ガ 1／ 0	ギ	**グ** 0／ 8	**ゲ** 0／ 4	**ゴ**11／ 0
サ 3／31	**シ**30／22	**ス** 0／ 7	セ	ソ
ザ	**ジ**28／ 0	**ズ** 0／12	ゼ	ゾ
タ17／ 0	**チ** 3／23	**ツ** 1／13	テ	**ト**22／15
ダ			**デ** 0／ 8	ド
ナ	**ニ** 0／ 2	ヌ	**ネ** 0／ 1	ノ

ハ	ヒ 1／0	フ	ヘ	ホ 1／0
バ	ビ	ブ 2／16	ベ	ボ
マ 3／0	ミ 6／20	ム 9／0	メ 2／0	モ 0／2
ヤ21／0		ユ		ヨ 0／1
ラ 2／0	リ 1／35	ル18／14	レ	ロ 1／31
ワ				
ン 0／4				

表10　女性の語末音分類表（2拍／3拍）

ア 1／2	イ 4／3	ウ 2／0	エ 5／38	オ 4／0
カ 5／28	キ 5／10	ク 1／0	ケ	コ 1／92
ガ 0／1	ギ	グ	ゲ	ゴ
サ 3／6	シ	ス	セ 0／2	ソ
ザ	ジ	ズ 1／1	ゼ	ゾ
タ	チ 1／0	ツ 0／2	テ	ト 0／5
ダ			デ	ド
ナ 8／9	ニ	ヌ	ネ 0／1	ノ 1／5
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ 6／4
バ	ビ	ブ 0／1	ベ	ボ
マ 3／1	ミ13／44	ム 0／2	メ 1／0	モ 2／0
ヤ 3／0		ユ 1／0		ヨ 2／20
ラ 1／1	リ 6／11	ル 0／7	レ	ロ 0／2
ワ 1／0				
ン 1／0				

分布表に関して語長との関係について述べておく。先に男性名の2拍と5・6拍の語を検討したとき、それらの音の構成に一定の傾向があることを述べた。2拍の語末には母音と撥音ンが立ちやすいく、5・6拍では<〜ロウ・スケ>など後部要素がかぎられ、当然語末の拍も特定の拍（**ウ・ケ**）に決まっている。

したがって、男性名の語末音の分布をみるには、これらの語を除外するのが適切と考えて3・4拍を対象とした。ただし、語長との相関をみるために、男女とも拍数によって分けて掲げた。

4．1　全体的傾向

男女とも語頭音とは異なった分布となり、拍の種類も減少している。拍別合計の上位を示す。

【男性】①**キ**73　②**シ**52　③**ト**37　④**リ**36　⑤**サ**34　⑥⑦**ル**・**ロ**32
⑧**オ**29　⑨⑩⑪**ウ**・**チ**・**ミ**26

【女性】①**コ**93　②**ミ**57　③**エ**43　④**カ**33　⑤**ヨ**22　⑥⑦**ナ**・**リ**17
⑧**キ**15　⑨**ホ**10　⑩**サ**9

男性で11位までの合計は403、女性は10位まで316で、全体（男675、女379）に占める比率は60％、83％である。上位５位までは男性232（34％）に対して女性248（65％）で、語末音でも女性名は特定の拍に集中する傾向がある。**コ**が断然多く、**ミ**・**エ**・**カ**・**ヨ**に偏るためでもあることは、10位がすでに一桁という数字から明らかである。

男女間では、男性２位の**シ**に女性の語例がなく、逆に女性３位の**エ**は男性の語例がない。男性３位の**ト**や６位の**ル**・**ロ**も、女性でそれぞれ５語、２語と稀である。男性８位の**オ**、９位の**ウ**についても、女性は４語、２語にすぎない。詳しくは行別に述べるが、このあたりに男女間の差がありそうである。

4．2　行別の検討

各行別に検討する。語頭音の場合もそうであったが、語末音の分布は語末の拍をみるだけでは実態がとらえにくいようである。

［母音］

女性で５種あるが、**エ**を除いて語例が少ない。男性では**ア**・**エ**が空白である。

アは男性になく、女性にのみ＜ミア＞＜マリア・ユリア＞がある。

イは男性の４拍に多く20語中15語が＜～ヘイ（ペイ）＞で、＜～セイ・～ダイ＞各２語のほか＜コウエイ＞がある。３拍の＜タヘイ＞もこれに準じ、他は＜モトイ＞だけである。女性は多様で、２拍の＜アイ・マイ・ユイ・レイ＞、３拍の＜アオイ・ミレイ・ヤヨイ＞がある。

ウは男女間および拍数にかかわらず、すべて直前拍とともに長音（オ段長音、稀にウ段長音）となる。男性で＜～ロウ＞12語、＜～ゾウ＞11語で大半を占め、＜～ユウ＞２語のほかは＜～コウ・～ショウ・～ホウ・～キュウ＞である。こうした長音終止は女性には少なく２拍の＜ユウ・リョウ＞しかない。

エは女性にかぎられる。＜カエ・タエ・チエ・ミエ・リエ＞と２拍の語例もあ

るが、種々の２拍の前部要素に**エ**の付いた３拍が大部分である。

エが女性的だとすれば、**オ**は男性的である。ただし、４拍はすべて＜～ナオ＞である。３拍が＜２拍＋オ＞の構成である点は女性の**エ**によく似ている。女性では３拍の語例がなく、＜ナオ・マオ・ミオ・リオ＞とすべて２拍である。男性の３拍と紛れることを避けるためであろう。

［カ行］

カ行は男性に５種ともあるが、女性は**ケ**の語例がなく、**ク**も＜ミク＞１語である。代わりに**コ**に多数の語例がある。

カは男女とも多いが、男性の４拍15例はすべて＜～タカ＞である。３拍の方が＜アスカ・セイカ・ホタカ・ホダカ・ユタカ＞と自由で、女性に通じるところがある。女性では＜ミカ・ユカ＞などと２拍にも語例がある。

男性の**キ**は４拍の46語中24語が＜～アキ＞、21語が＜～ユキ＞で、残りは＜～オキ＞である。３拍は＜カズキ・ナオキ・ヒロキ・ユウキ＞など27語ある。女性にも３拍の＜チアキ・ナツキ・ミユキ＞、２拍の＜アキ・マキ・ユキ＞などがある。数字だけでは男女の差が現れにくいが、３拍の直前の母音を比べると、男性のイ段＜タイキ・トシキ・ヨシキ＞、エ段＜シゲキ・ヒデキ＞、オ段＜ナオキ・ヒロキ・モトキ＞が女性になく、ア段とウ段にかぎられる。

クは、男性４拍の６語中５語と３拍の１語が＜～サク＞である。残る３拍の語は＜キズク・タスク・ミガク＞と動詞に由来するものである。女性の**ク**が＜ミク＞１語であることは上に述べた。

ケは女性の語例がない。男性では４拍ばかりで16語中15語が＜～スケ＞、あとは＜マサタケ＞である。これでは３拍の語例は生じにくい。

コは女性名を代表する語末音で３拍の30％を占め、全体でも24％に及んでいる。２拍が＜マコ＞しかないのも＜２拍の前部要素＋コ＞という女性の特色を表すのであろ[注5]う。そのため、男性では３拍の語例が皆無である。４拍もすべて＜～ヒコ＞であり、女性名と紛れないためにちがいない。

［ガ行］

ガ行は**ギ**に語例がなく、**ガ**のほかはもっぱら男性に現れる。

ガは男女とも１語ずつ、男性＜タイガ＞と女性＜ギンガ＞がある。表10から、

注5　各種の名付け書をみると、男女をとわず、こうした１拍の標識的な音を「添え字」あるいは「止め字」とよぶ習慣がある。「字」というところに、人名が表記を中心に考えられている事実が反映している。

語頭と同じく女性名の語末に濁音が立ちにくいことは明らかだから、やはり＜ギンガ＞は例外的である。＜タイガ＞も男性として珍しく、**ガ**は人名の語末には現れにくいようである。

グは４拍の８語すべてが＜～ツグ＞である。同じく４拍にかぎられる**ゲ**もすべて＜～シゲ＞である。

ゴは逆に３拍の語例だけで、＜ダイゴ・ショウゴ・ケンゴ・シンゴ＞など、前部要素の２拍目が母音**イ**・**ウ**と撥音**ン**にかぎられる。男性名の標識として働いているように思われる。

［サ行］

サ行では男性で**セ**・**ソ**の語例がなく、女性でも**シ**・**ス**・**ソ**が空白である。

サの男性４拍の31語は、＜～ヒサ＞17語と＜～マサ＞14語に二分され、しかも＜カツヒサ：カツマサ＞＜タカヒサ：タカマサ＞＜ヤスヒサ：ヤスマサ＞などと互換的である。３拍は＜ツカサ・ツバサ・ナギサ＞など名詞に由来する。＜ツバサ・ナギサ＞は女性にもある。女性の２拍は＜チサ・ミサ・リサ＞で、語頭がイ段の拍だが、３拍にはそうした傾向はない。

男性専用の**シ**は、語長により性格が異なる。４拍の22語は＜～トシ＞14語と＜～ヨシ＞８語に二分される。３拍は＜アツシ・サトシ・タカシ・タケシ・ツヨシ・ヒロシ・マサシ＞など形容詞の古形、＜エイシ・ケイシ・ジュンシ・セイシ・タクシ・テツシ・レツシ＞といった＜字音語＋シ＞、語構成不明の＜カズシ・カツシ・ヒデシ・モトシ＞に分かれる。**シ**が男性の標識であるために、こうした語が生じるのだと思われる。だとすれば、形容詞の古形と同じ＜アツシ＞以下の語も、＜アツ＋シ＞の語構成と考えるべきかもしれない。

スは男性の７語すべてが＜～ヤス＞である。

セは男性の語例がなく、女性に＜チトセ・ナナセ＞２語がある。

ソは男女とも語例がない。濁音を別にすれば、オ段音で男女を通じて例がないのはこの拍だけである。

［ザ行］

ザ行は**ジ**・**ズ**にかぎって語例がある。

ジは男性で３拍の語だけで、前部要素の２拍目が母音**イ**・**ウ**と撥音**ン**に集まるところは、ガ行の**ゴ**と酷似する。＜エイジ・ケイジ・セイジ＞＜コウジ・シュウジ・ユウジ＞＜ケンジ・ジュンジ・シンジ＞などである。ただ、他に字音由来かと思われる＜タクジ・テツジ・リキジ＞や和語と混じた＜ヒロジ・モトジ＞、字

音とも和語とも不明の＜カツジ・タツジ＞があるところは、サ行**シ**の在り方と似ている。**ジ**も男性名の標識として働いているのであろう。

ズは女性に＜ミスズ＞1語があり、男性では＜ヒロカズ・ヨシカズ＞など12語すべてが＜～カズ＞である。

［タ行］

タ行は**テ**が男女とも語例がなく、女性では**タ**の語例もない。

タは男性専用で4拍はない。＜アラタ・カゼタ＞を除いて＜ケイタ・ケンタ・シュウタ・ユウタ・リョウタ＞など2拍目が母音**イ**・**ウ**と撥音**ン**という特徴があるところは**ゴ**・**ジ**に似ている。

チは女性には＜サチ＞だけで、あとは男性専用である。4拍では＜～イチ＞16語、＜～ミチ＞6語のほかに＜～キチ＞があり、3拍では＜タイチ・リイチ＞とやはり＜～イチ＞を含むほか＜ダイチ＞がある。

ツも女性には少なく＜アキツ・チナツ＞2語である。男性の4拍では＜～ミツ＞7語、＜～カツ＞4語のほか、＜タダアツ＞＜マスタツ＞があり、3拍は＜タモツ＞1語である。

トは男性に多いが、女性でも3拍の語が＜アサト・マコト＞とある。男性では、4拍の15語は＜ツグモト＞を除いてすべて＜～ヒト＞である。3拍の中にも＜～ヒト＞の短縮形＜～ト＞が＜アキト・タカト・ナオト・マサト＞などと多く、＜ホクト・マコト＞などの名詞に由来する語、＜スミト・ノブト・ヒデト＞など**ト**を接尾辞的に付けたもの、＜ケント・タクト＞など字音語との混種もある。これも男性の標識として働いている。

［ダ行］

ダ行は女性になく、男性でも**デ**が＜～ヒデ＞の形であるだけである。

［ナ行］

ナ行は女性に比較的多いが、**ナ**・**ノ**に語例が多いほかは**ネ**の1語だけで、男性でも**ナ**・**ヌ**・**ノ**が欠如し**ニ**・**ネ**も稀である。**ニ**・**ヌ**・**ネ**は語頭にも稀であったことが想起される。

ナは女性の専用で、＜カナ・ナナ・リナ＞＜エリナ・カンナ・ハルナ＞など多彩である。

ニは女性では語例がなく、男性では＜～クニ＞として2語がある。

ネは男性＜トシムネ＞、女性＜アカネ＞の各1語があるだけである。女性にもっと多用されそうだが、実際はちがっている。

ノも女性の専用で、2拍の<ユノ>、3拍<アヤノ・イクノ・ヒロノ・ユキノ・ヨシノ>などと、男性の**シ・タ・ト**などと同様に女性の標識のようにみえる。

［ハ行］

ハ行は男性に**ハ・フ・ヘ**がなく、女性には**ハ・ヒ・フ・ヘ**の4種が欠ける。語頭以外のハ行音は、古くハ行転呼によって語中尾で消えたが、**ホ**以外の拍がごく稀であるのはその名残だろうか。

ヒは男性に<アサヒ>1語しかない。

ホは男性には<カズホ>しかないが、女性には10語ある。2拍の<カホ・サホ・シホ・チホ・マホ・ミホ>、3拍の<アキホ・カズホ・ミズホ>などの**ホ**は、**ノ**と同様に女性の標識のようである。

［バ行］

バ行は、女性では**ブ**の<シノブ>が唯一の語である。男性でも**ブ**以外の語例はない。

ブは男性の4拍で<～ノブ>として現れ、3拍では<シノブ・マナブ>とバ行動詞に由来する語があるのは、女性に通じる。

［マ行］

マ行は**ミ**の語例が多く、男性に**ム**がやや多いほかは稀である。

マは、男性では3拍、女性では2拍にしか語例がない。男性の<カズマ・セイマ・タクマ・ユウマ>におけるマは字音語「馬」と結びつくから、女性の<エマ・シマ>とは印象がずいぶんと異なる。

ミは男女とも多くの語例がある。男性の4拍は<～フミ>16語、<～オミ>4語で、3拍では<カヅミ・タカミ・タクミ・ヒロミ・マサミ・ミナミ>と女性とほとんど区別できない。語末のミの音そのものは男女のちがいを示さない。とはいえ、女性に多用される事実は否めず、特に2拍の<アミ・エミ・クミ・ナミ・フミ・マミ・ユミ・ルミ>などでは男性に通じる印象はまったくない。

ムは男性の3拍に<イサム・オサム・ススム・ツトム・ノゾム・ヒロム>といった動詞に由来する語がある。女性の<ナツム・メグム>も同じである。

メは稀で男性の<カナメ・ハジメ>2語、女性の<ユメ>があるだけである。

モも語例が少なく、男性で4拍に<タカトモ・ヤストモ>など<～トモ>としてあり、女性では2拍の<トモ・モモ>だけである。

［ヤ行］

ヤ行については、語頭音として語例の多かった**ユ**が稀なのが注意される。また

ヤが男性に、**ヨ**が女性に偏る傾向にある。

ヤは男性に多く、すべて3拍である。<カズヤ・タカヤ・テルヤ・トシヤ・ナオヤ・ヒロヤ・マサヤ>など<2拍和語＋ヤ>、<ケイヤ・ケンヤ・シュンヤ・ジュンヤ・シンヤ・タクヤ・ユウヤ・リュウヤ>など<2拍字音語＋ヤ>もあることから、**ヤ**は男性の標識として働いていると考えられる。そのため、女性の3拍は避けられ、語例は<アヤ・マヤ・ミヤ>などすべて2拍である。

ユは女性に<マユ>があるだけである。語頭音として多用された**ユ**が、なぜか語末音には現れていない。

ヨは、男性には<シゲトヨ>だけだが、女性には多い。<カズヨ・サチヨ>などと2拍の前部要素に付いて3拍となり、2拍は<カヨ・マヨ>である。**ヤ**と**ヨ**とが、母音交替形として男女の機能を分担しているようにも思える。

［ラ行］

ラ行は**リ**・**ル**に語例が集まる。**ラ**は男女とも稀で、**レ**の語例はない。**ロ**はほとんど男性にかぎられる。

ラは男性に3語ある。述べ語数の多い<アキラ>と<タイラ・マスラ>である。女性では<ソラ・タカラ>2語と稀である。

リは男性では4拍35語が<～ノリ>25語、<～ナリ>7語、<～ヨリ>2語に分かれ、<～アリ>が1語ある。3拍は<イオリ>だけである。多彩なのは女性で、3拍には<アカリ・カオリ・ヒカリ・ミドリ・ユカリ>といった名詞由来のものに<エミリ>があり、2拍では<セリ・ユリ>もあるが<エリ・サリ・ジュリ・マリ>など外来語の影響を思わせるものがある。

ルは男性の4拍14語は<～ハル>10語と<～テル>4語に二分され、3拍は<イタル・サトル・トオル・マサル・ワタル>とすべて動詞に由来する。この点、女性の3拍<イヅル・カオル・ミチル>も同じで、名詞由来の<スバル・チヅル・チハル・ミハル>と併存している。

ロは男性に語例が多いが、4拍は<～ヒロ>の1種で自由さはまったくない。3拍は女性にもみえる<チヒロ>1語で、女性では<ヒイロ>が加わる。

［ワ行］

ワ行の**ワ**は男性になく、女性の<ミワ>があるだけである。

［撥音ン］

撥音**ン**で終止する語は男性では4拍に4語ある。<イッシン・エイシュン・コウジン・ドウネン>と音声的な構成が類似する。3拍は語例がない。女性では、

2拍の<ジュン>だけである。濁音語にしか語例がないというは、撥音**ン**で終わる語が女性としてはまだ例外的なことを思わせる。

4．3　母音別の検討

日本語の活用語（動詞・形容詞・助動詞など）は、語末の拍が一定の母音で示される。例えば、動詞終止形は必ずウ段の拍で終わり、形容詞はイを語尾とする。名詞などは様々だが、こうした語末に特有の母音が人名にも認められるだろうか。

次の表11は、表9・表10を母音別に集計したものである。

表10　語末音の母音別集計（男性は3拍／4拍、女性は2拍／3拍）

【男性】	ア段52／46	イ段98／168	ウ段39／99	エ段 2／29	オ段60／ 74
【女性】	ア段25／48	イ段29／ 68	ウ段 6／13	エ段 6／41	オ段16／128

母音別に合計をみると、男性ではイ・ウ・オ・ア・エ段の順で多く、女性ではオ・イ・ア・エ・ウ段の順となる。男性と比べると、女性ではオ・ウ・エ段の順位が異なっている。女性にオ段が多いのは**コ**に多数の語例があるためで、**ヨ**を除けば他の拍が多いわけではない。エ段では**エ**の多用が寄与している。**セ・ネ・メ**が1～2語であるから、エ段の拍が女性で好まれるとは言えない。ウ段が男性で多いのは、字音語に由来する<～ロウ・～ゾウ>や和語動詞に由来する語を多く含むためである。後者は女性にもあるのだが、少数にとどまっているあたりに男女間の相違が認められる。

語長別にみると、3拍が4拍より優勢なのは、男性ではア段の**タ・ヤ**、イ段の**シ・ジ**、ウ段の**ル**、オ段の**オ・ゴ・ト**である。**ル**は由来となった動詞の語尾だが、他はいずれも男性の標識として機能する例が多いためである。3拍の語長を基本とする女性には、もともと**エ・コ・ミ・ヨ**などにそうした特徴が濃厚である。女性固有の特徴はむしろ2拍の語に求められる。他の拍と自由に組み合わせて語を構成する手法は、女性の2拍に著しい特徴だからである。2拍の語例が最多の**ミ・ナ**を例示する。

　アミ　エミ　キミ　クミ　スミ　タミ　ナミ　フミ　マミ　ミミ　ユミ　ルミ　レミ

　エナ　カナ　ナナ　ハナ　マナ　ミナ　リナ　レナ

こうした組み合わせで作られた語は、具体的な意味内容をもつ語として機能す

ることはなく、純粋に記号的な呼称となる。上の人名が「網、笑み、君・・・」や「胞衣、金、七・・・」などの意味と結びつくことはなく、<ルミ・レミ><リナ・レナ>に至っては積極的に意味を拒んでいるとすら感じられる。女性名は語頭の濁音拍を避けるという伝統性をまもりながら、一方では男性には思いもよらない新鮮な試みがある。もちろん、上をみるかぎりではオ段の拍との組み合わせがないことも指摘できそうだが、男性の4拍の語が<～オミ・～フミ>にしばられているのに比べれば自由さは明かである。

念のために言えば、語頭の拍にも通じることだが、女性の語末の拍には、濁音がガ・ズ・ブのほかは語例がなく、ウ段・エ段の拍についても稀だという制約がある。自由な組み合わせとはいっても、それは一定の拍の範囲の中で行われていることなのである。

5　最後に

人名の語頭の拍に濁音があるのかという単純な着想から始めたが、人名を語として位置づけて分析してみると、様々の課題のあることがみえてきた。<ジュンコ>という女性名がなぜ許されるのかを始め、語頭・語末にかぎらず、人名における「音配列の自由度」という観点から、あらためて分析方法を考えてみたい。

ついでながら、Web(http://www.kodomo-net/ranking.html) で閲覧したところでは、2001年の子供の名前ランキングは次のとおりである。

【男子】①大輝 ②翔 ③海斗 ④陸 ⑤蓮・翼 ⑦健太・拓海 ⑨優太・翔太

【女子】①さくら　②未来　③七海　④美月・結衣　⑥美咲　⑦玲奈
⑧優花・萌　⑩琴音・彩花

ヨミがないため、確言はできないが、男子に4拍の語がなく、2拍がショウ(翔)・リク(陸)・レン(蓮)と3語もあることが分かる。女子でも、ミク(未来)・ナミ(七海)・ユイ(結衣)・レナ(玲奈)・ユカ(優花)・モエ(萌)と2拍が過半で、表記の異様さは別として、本稿で指摘した事実の延長線上にあると言えるだろう。

<参考文献>

今栄国晴(1960)「日本語のdigramの相対頻度とその特性」『心理学評論』4-1
出口顯(1995)『名前のアルケオロジー』紀伊國屋書店
西江雅之(1989)『ことばを追って』大修館書店

林大（1957）「語彙」『講座現代国語学Ⅱ　ことばの体系』所収、筑摩書房
林大（1982）『図説日本語』角川書店